

平成26年度
喜多方市小学校農業科作文コンクール

作品集



喜多方市教育委員会

喜多方市小学校農業科作文コンクール作品集

発刊に寄せて

喜多方市教育委員会教育長 芳賀 忠夫

今年も市内全小学校十七校、千七百十一名で小学校農業科を実施することができました。農業科の運営にあたり、地域の皆様、JAを始めとした関係機関の皆様、耶麻農業高等学校の皆様、各校の先生方など、多くの皆様のご支援とご協力に対して心から御礼と感謝を申し上げます。

さて、喜多方市の小学校農業科は「農業のもつ教育的効果を学校教育に生かす」「喜多方市の基幹産業である農業を学校教育に生かす」「子どもたちのもつ農業に対するプラスイメージを学校教育に生かす」を目的に、平成十九年四月から『農業科』の授業を全国で初めて三校で実施しました。小学校農業科では農業そのものを学習するのではなく、豊かな心の育成、主体性の育成、社会性の育成など現代社会における様々な教育課題を解決する手段として八年間取り組んで参りました。この小学校農業科作文コンクールは、子どもたちの取り組みや農業科を通してどんな考えをもったのか、どんな子どもが育ったのかを多くの方々知っていただくために平成二十一年度より発刊を始め、今年は千六百七十名の作品応募がありました。

子どもたちの作品は、「農業・自然・環境」、「いのち」、「喜び・感謝」、「くらし・関わり・生き方」の四つの観点から書かれており、子どもたちの農業に対する感じ方や見方には驚かされるばかりです。これらは決して体験しなければ表現できない思いがたくさん詰まっています。また、農業科支援員さんと連携しながら取り組む様子や家庭での祖父母が農業に取り組む様子、いのちを一生懸命育てる様子、農業科で協力を学ぶ様子、お世話になった方々や食べ物に対する感謝等々、子どもたちの言葉で感じたことが、素直な言葉で表現されております。今回、千六百余りの作品から四十五作品の紹介となりますが、他の作品も甲乙つけがたい作品ばかりで多くの方々に紹介できないのが残念でなりません。それだけ喜多方市の小学校農業科は、魅力ある体験型の授業だと自負できるものと言えます。

最後に、大変お忙しい中、ご寄稿いただきました関東学院大学の佐藤幸也先生、審査をしてくださった審査員の皆様、冊子の作成にご協力いただきました北海道教育大学の佐々木貴子先生と学生の皆様に心より感謝申し上げます。今後も喜多方市の小学校農業科が、明るい喜多方っ子を育てる一助となれるよう取り組んで参りたいと思います。

地域創生と生命のカリキュラムで育つ子どもたち

「農業科」が拓いた新たな教育

関東学院大学教授 佐藤幸也



喜多方市の小学校農業科は、二十一世紀に必要な教育であることが理解されます。それを『作文集』から見るができます。約二千人の子どもたちが書いている農業科の作文には、田圃や畑の生きものの出会い、稲との出会い、農業科を支援してくださる人々との出会い、自分たちが育てた作物を買ってくれる人、一緒に食べてくれる人、作物を届けてお礼を言ってくれるお年寄りとの出会いなどが書かれています。そして、それらとの出会いがもたらす喜び、感動が綴られています。

喜多方市以外でも隣の米沢・置賜地域（高畠町二井宿小学校など）、朱鷺の島づくりを進める佐渡、喜多方市と同じ年に日本農業賞を受賞したコウノトリの里づくりを進める兵庫県豊岡の人たちなど、少数の人々、学校の子どもたちが、本気になって（生命と育ちあう）学習を行っています。

喜多方の子どもたちは、水田がただ稲を育てているだけではないことをよく知っています。喜多方全体が山の恵、水の恵み、生命に満ちており、その中で自分たちが生きていることを、農業科の学習を通じて理解しています。田んぼに入り、おたまじやくしやドジョウ可愛いと思ひ、雑草取りをしながら目に入ってくる蜘蛛を「気持ち悪い」と言わずに害虫を食べてくれていると感謝し、稲刈りの時のトンボの群れに感激し、稲刈りの終わった後の田んぼに雀や渡り鳥が落ち穂を食べる姿に、自分たちとの命のつなが

りを感じます。

どんな小さなものにも生命があり、それらを大切に思い、次の世代が生まれてくることを願います。生命への共感が育っているのです。

このような教育を実践している喜多方は全国から注目を集めています。それは、農業科を教育長先生始め、市民や市長が支援し、支援員さんや指導してくださる関係者の方々を信頼しているということです。（いのちの教育をめぐる信頼のネットワーク）に感謝するのです。その中で育ちあう子どもたちの姿に未来を感じ取るからです。

教育は未来を創造する大切な仕事ですが、そこにいろいろな人が参加して、自らの未来をも拓いているのです。ここに、喜多方市小学校農業科のねらいが集約されています。喜多方市農業科は、喜多方だけではなく、日本のこれからの理想的姿、すなわち地方創生の理念を示しているのです。

喜多方の農業科、子どもたちとの出会いは、人々を幸せにします。二十一世紀をすべての人々が生きるに値する社会にするため、農業科の果実を世界の人々、特に苦しい生活を余儀なくされている人々と分かち合いたいと思います。農業科は、恵まれない人々に生涯を捧げた瓜生岩子先生、勤労と農村文化を大切にした蓮沼門三先生、弾正ヶ原に集い自由民権で喜多方の人々が掲げた理想を受け継いでいるように思います。

どんな小さな命、魂も大切にする、ということです。農業科で学ぶ子どもたちの作文は、人間にとって最も大切なものを教えてくれています。

入
賞
作
品

目次

【大賞】

受け継がれている米の命

上三宮小学校 六年 佐藤 梨乃 12

農業科活動を通じて学んだこと

堂島小学校 六年 辰野 楓真 15

作物の命の大切さ

熊倉小学校 六年 小林 菜々子 13

ぼくが考える農業

堂島小学校 六年 外島 大地 16

小学校最後の米作りで学んだ大切なこと

加納小学校 六年 渡部 光 14

【優秀賞】

三年生のみなさんへ

塩川小学校 三年 五十嵐 和奏 17

農業からできる三つの笑顔

第二小学校 五年 鈴木 愛唯 17

農業科学習で知った米一粒のありがたみ

豊川小学校 五年 山内 優輝 18

作物の生命力

熱塩小学校 五年 菅井 日花里 19

手作業での稲作

塩川小学校 五年 佐野 茜奈 20

農業でまなんだ作物の大切さ

山都小学校 五年 浅見 露乃 21

く米一粒にこめられた思いく

第一小学校 六年 早川 出海 21

大好きな農業ありがとう

第二小学校 六年 堺 愛純 22

祖父母を手本にして

関柴小学校 六年 高橋 結衣 23

手作業の大切さ

関柴小学校 六年 小椋 愛美 24

【農業科賞】

大豆を育てて

第一小学校 三年 夏井 翼 25

楽しかった農業科。

第二小学校 三年 大島 夢音 26

大事に育てた大豆

松山小学校 三年 上北 晁稟 27

楽しい大へん農業科

上三宮小学校 三年 飯野 隼斗 28

ありがとう、大豆。

豊川小学校 三年 折笠 夏希 29

野菜作りの苦ろうと感しゃ

慶徳小学校 三年 佐藤 美心 29

おいしい野さいを育てたよ

熱塩小学校 三年 瓜生 琴子 30

しえんいんさんに教えてもらったこと

加納小学校 三年 山本 知佳 31

ともろこしのしゅうかくでおぼえたこと

加納小学校 三年 佐藤 ひな 32

がんばって育てたサツマイモ

塩川小学校 三年 澁谷 平 33

黄色い宝石ポップコーン

姥堂小学校 三年 川上 はづき 34

カボチャを育てて

第一小学校 四年 鈴木 啓也 35

楽しかった農業科

第三小学校 四年 小野寺 尋音 36

作物をしゅうかくする喜び

山都小学校 四年 齋藤 水月花 36

里いも里いも大きくなあれ

高郷小学校 四年 長水 萌 37

農業のすばらしさ

松山小学校 五年 原 柚葉 38

協力・関わり

第三小学校 五年 若菜 愛実 39

米作りを通して

慶徳小学校 五年 小澤 沙也加 40

ポップコーンを育てて

姥堂小学校 五年 大泉 海翔 41

みんなで協力し合った稲刈り

駒形小学校 五年 鈴木 瑞穂 41

小学校最後の農業科で学んだこと

第二小学校 六年 羽入 彩乃 42

大根からあふれる笑顔

第二小学校 六年 石原 大地 43

農業の楽しみとは

松山小学校 六年 猪俣 穂香 44

支えてくれる支援員の方々への感謝

第三小学校 六年 小澤 沙友里 45

ぼくにとっての農業

熊倉小学校 六年 五十嵐 大貴 46

六年間の農業を通して

熱塩小学校 六年 福王寺 郁哉 46

感謝の気持ちで

熱塩小学校 六年 菊地 唯 47

ありがとう、食事ができるよ。

塩川小学校 六年 武藤 療平 48

農業とは協力すること

塩川小学校 六年 栗村 大智 49

農業が教えてくれたこと

高郷小学校 六年 清野 花香 50

喜多方市小学校農業科作文コンクールに寄せて

北海道教育大学教育学部札幌校 総合学習開発専攻

生活・食育グループ 四年目 荻野目 哲

編集後記

54

52

【大賞】

個人情報保護のため児童
の写真を削除しています

受け継がれている米の命

上三宮小学校 六年 佐藤 梨乃

「やわらかい土の中に、そっとまいた小さな種が青い芽をふき、それが日ましに大きくなって、やがて黄金色の実りに変わる。あの育てあげる喜び、あれさえわかったら、少しぐらいの苦しみを受けたって、平気だって、きっとあなたも言うに違いないわ。」

これは、私たち六年生が学習発表会で演じた劇、「米つくり」のせりふです。この劇は、縄文時代の終わり頃、米づくりが日本に伝わったばかりの時代の物語です。この劇を演じて、私たちの祖先は代々、苦難を乗り越え、米つくりを続けてきたことを知り、とても感動しました。

毎年、学習発表会の後には、地域みなさんと共に収穫

祭が行われます。農業科の学習で育てた米で作ったおにぎり、畑で育てたジャガイモやサトイモを食材にしたいも汁。私たちが苦勞して育てた作物だけに、とてもおいしくいただいてきました。しかし、今年の収穫祭では、ただ「おいしい」ということだけでなく、米や作物に対する考え方が深まりました。それはきつと、「米つくり」という劇を演じたからなのかもしれません。

私たちが毎日、当たり前のように食べている米。それは、農家の方が種をまき、田を耕す作業から始まり、脱穀まで心をこめて育てたからできるのだと思います。また、私たち人間は、愛情や手間、時間をかけて子どもを育て、その子どもが大人になり、また同じように子どもを育てています。それと同じように、米を大切に育てるたくさんの人々がいて、その心をこめた米つくりを代々受け継いできたのだと思います。その古代からの米の「命のつながり」と、人間の「命をつなげるはたらき」があったからこそ、今私たちは毎日おいしいご飯が食べられるのだと感じました。

収穫祭で、私たち六年生はおにぎりを作るお手伝いをしました。温かくて真っ白いご飯を見つめながら、去年までの自分よりちょっと成長した自分を感じることができました。

個人情報保護のため児童
の写真を削除しています

作物の命の大切さ

熊倉小学校 六年 小林 菜々子

私は、小さかったころ、よく祖母が畑仕事をしている所についていって作業を見たり、実際にお手伝いをしたりしていました。けれどそのころは、祖母がやっているから自分もやってみたい。というだけで、作物の命のこと、自分が感謝して食べないといけないことなどまったく考えてもいませんでした。それどころか、作物が生きていることも知りませんでした。

一年生から畑で作物を育てることをクラスのみんなややって六年。マルチかけ、草むしり、種まき、すべて適切に早く行うことができるようになりました。けれど、作物には命があると知ったのは四年生のころです。確かに作物は種から立派に成長するまでには工夫して、毎日世話をしな

ければいけません。逆に世話をしなかったり、工夫して世話をしたりしなければ死んでしまいます。作物は、口も目も鼻も耳もないけど、おいしい作物になるようにじつと、私たちのために成長していくのです。そう思うと、私は「作物の命と人間の命の重みは同じだ。」と感じられるようになりました。作物がなかったら、私たち人間は食べる物が少なく、死んでいたかもしれません。人間の命と作物の命は深くつながっているというのを知ることができたのは、農業を体験したおかげだと思います。

けれど、今の時代は、農業をやらなくても豊富な食べ物が手に入ります。自然よりも機械などが発達し、あちこちでビルや工場が立つようになり、田んぼや畑、緑が減るようになっていました。もしも、農業ができないような所で生まれていたら、作物の命の大切さのことなど、まったく分かんなかったでしょう。この農業がさかな喜多方に生まれたことに感謝し、これからも作物の命を大事にしていきたいです。

個人情報保護のため児童
の写真を削除しています

小学校最後の米作りで学んだ大切なこと

加納小学校 六年 渡部 光

私は今年の米作りで、どんな事にも真面目に取り組むという事の大切さを学びました。

去年は六年生といっしょに米作りをしました。初めてやることばかりで大変だったし、あまりお米の大切さを考えていませんでした。去年の米作りで初めてやった事の中に「一人暮らしのお年寄りの方への赤飯届け」がありました。私達が作ったもち米を使って、ていねいに赤飯を作りました。しかし、届ける時に六年生ばかりにたよってしまい少しも声を出す事ができませんでした。お礼を言われて、とてもうれしいのになかなか話す事ができませんでした。でも、今年の私は違いました。今年は六年生で最後の米作りなので、真面目にやろうと思い米作りプロジェクト委員になって作業をしました。除草作業では五年生に教えながら

やりました。去年は遊びながらダラダラとやっていたのが、今年はとても速く

「上手だね。家に田んぼあるの？」

と言われるぐらいスムーズに作業をする事ができました。

そして、いよいよ赤飯届けです。「今年は五年生に教える立場だし、しっかりやろう」と心に決めて一人暮らしのお年寄りの家に行きました。

「こんにちは。加納小です。赤飯を届けに来ました。私達で作ったので食べて下さい。」

と言うと、

「ありがとう。いつもありがとうね。」

と言って下さいました。今まで何回も「ありがとう」と言ってもらった事があるのに、初めて言われたみたいにとってもうれしくて笑顔になりました。「ちゃんと心をこめて渡すと相手に気持ち伝わるんだ」と思いました。

私は、今まで自分が苦手な事には真面目に取り組んでいない時がありました。でも、今回の米作りで真面目に取り組むと相手に気持ち伝わって、こっちがうれしい気持ちや、やって良かったなと思う事ができました。これからは、どんな事にも真面目に頑張って色々な事にチャレンジしていきたいです。

個人情報保護のため児童
の写真を削除しています

農業科活動を通じて学んだこと

堂島小学校 六年 辰野 楓真

一年生の時、農業科と聞いてもはじめは何をするのかわからなかった自分。でもサツマイモやトウモロコシを作って、作ることがどんどん楽しくなってきました。

それからはニンジン、長ねぎ、大豆、大根、里いも、ジャガイモ、稲、いろいろ作ってきました。それはぼくにとつて学校の授業の中で一番楽しい時間になりました。とても大切な時間でした。

作物の種をまいて収穫するまでの間は水やりや草むしり、台風の心配など苦労はありましたが、野菜の出来具合を見ながら収穫し、それを学校で調理実習や収穫祭で食べたときのおいしさは特別でした。みんなが、
「おいしい、おいしい。」

と食べることに、ぼくは喜びを感じました。

また、農業科では野菜の栄養についても学びました。たんぱく質、ビタミン、カロチンなどです。米も、野菜も、人間になくてはならないものでした。肉と魚だけでは人間の体のバランスが取れないことがわかりました。

家でも米や野菜を作っています。農業科をはじめからは、さらに祖父との農業の会話が増え、食卓が楽しくなりました。

こんなにすてきな農業ですが、仕事に行う人は年々減っているそうです。なぜでしょうか？農業を行っている人は年々高齢化し、農業をやめます。若い人たちは農業にみりよくを感じている人が少ないからではないでしょうか？農業のみりよくは自分で育てた野菜などが立派にできた時の喜び。そしてそれを食べた人の笑顔です。ぼくはそのことを農業科で学ぶことができました。体験してわかったことです。体験してみないとわからない世界があります。ぼくはこれからは農業だけでなく、いろいろなことにチャレンジして体験し、自分の力になるものを見つけていきたいと思っています。

個人情報保護のため児童
の写真を削除しています

ぼくが考える農業

堂島小学校 六年 外島 大地

堂島小学校の稲作栽培活動は、四月の種まきから始まります。その後は、六年生が中心となり、水をあげて、苗へと育てます。そして一ヶ月程すると、田んぼへ出かけ、全校生徒で田植えをします。六月になると除草を行います。秋には、穂が実ると稲刈りをします。収穫した米は、堂島フェスティバルの日に親子でもちつきをして、お世話になった協力員の方々に感謝してみんなで食べます。春から秋にかけて、大変な作業をみんなと頑張るから、楽しく特別おいしいと感じると思います。

今年は自宅でも田植えをしてみました。トロ舟に土を入れて、ビオトープを田んぼにしました。そこへメダカを泳がせて、中にわくミジンコなどをエサに、メダカは大きくなり稲も元気に育ちます。自然に水が入らないので、水を足し、除草などの世話をしました。秋になり、米を収穫す

る事に成功しました。ちゃんと米が収穫できるか半信半疑でしたが、玄米を収穫する事ができて、とても嬉しかったです。

稲の世話をしていると、多くの生き物が田んぼを利用している事が分かります。オタマジャクシやヤゴなど様々です。

現在、田んぼの姿は変わりつつあります。機械化が進み、大量生産できるようになりましたが、農薬や圃場整備により、昔みられた蛍やメダカなどの生物達は、風前の灯となつていきます。とても残念です。なので、僕は生物の事をしつかり考えて、無農薬で安全な米や野菜を作りたいと思います。農薬を使用しない害虫の駆除法の発見や、どんな土地でも使える機械の発明をしたいと思います。

生物が消えようとしている今だからこそ、人間と生物が共存できるよう努力して、おいしいお米や野菜を作り、自然豊かな、喜多方になるよう頑張っていきたいです。

【優秀賞】

三年生のみなさんへ

塩川小学校 三年 五十嵐 和奏

三年生のみなさん、さつまいもです。みなさんとはじめて出会ったのは、五月でしたね。私はまだ小さな「なえ」でした。みなさんは私をていねいに植えてくれました。土のベッドはフカフカでとっても気持ちがよかったですよ。みなさんの元気な声やにこにこした顔を見ると私も大きくなるうといっしょうけんめいになりました。

今年は、なえを植えてすぐ天気がつづいたので土もかわいて、私もかれたようになっていたのでした。しんぱいした人もいたみたいです。日曜日にジョーロで水をあげに来てくれましたね。あの時は本当にうれしかったです。ありがとうございます。

「天気」は、私を大きく育ててくれるのに、とても大事なんです。太陽・雨・土、どれがかけても私は大きくなることのできないのです。でも、晴れの日が続いたり、雨の日が続いたりするとあまり私に良くないのです。それから土にえいようがないと私も元気がでないのです。だからみんなの力がひとつようなのです。私は一人で大きくりっぱにな

るのは、むずかしいのです。

みなさんがお世話してくれたおかげで、私はじゅんちように大きくなり二人の子どももできました。十月には三年生のみんなでしゅうかくしてくれましたね。あの時のうれしそうな顔や声を今でもおぼえています。私も二人の子どもも大事にしゅうかくしてくれてありがとうございます。

そのあと二人の子どもとは、はなればなれになりましたが、悲しくはありませんでした。なぜなら、三年生のみなさんの「命のもと」になるのが分かっていたからです。私をゆでて、みんなでおいしそうに食べてくれましたね。また、あまくてとってもおいしいスイートにもしてくれましたね。私もみなさんの命のもととしてみなさんの中で生きつづけます。みなさん、本当にありがとうございます。来年のジャガイモもがんばって育ててください。

農業からできる三つの笑顔

第二小学校 五年 鈴木 愛唯

わたしたち五年生は、今年初めての田植えと、毎年学んでいる野菜作りをしました。今回学んだ農業から、わたし

は三つの笑顔を見つけました。

一つ目の笑顔は、協力し合って自然にできる笑顔です。協力し合うと、少し大変な事でも、楽しく活動できます。

今回の活動の中での大豆のなえ植えや田植えは、周りの人たちから見たら、「めんどくさそう。」とか、「大変そうだな。」などと、思う人の方が多いと思います。けれど、私は、大豆のなえを植えた後の水やりや草むしりも楽しくできましたし、田植えはどろだらけになっても楽しくできました。二つ目の笑顔は、自分達で作った物を食べた時にできる笑顔です。わたし達は、自分達で作ったお米から、おにぎりを作って食べました。とてもおいしかったです。友達と笑顔で食べました。大豆はまだ食べていけないけど、これから食べるのが楽しみです。大豆を使った「きなこもち」を作りたいです。

三つ目の笑顔は、自分が作った野菜を食べている人を見る方の笑顔です。自分が作った物を喜んでもらい、使ってもらえたり、食べてもらえたりするのは、とてもうれしい事だと思います。わたしたちが作ったおにぎりを、校長先生や教頭先生に食べていただいた時に、とてもうれしいなと思いました。

この三つの笑顔を作れる農業はとてすごいと思います。

わたしは、自分で作った野菜をもっともつと多くの人に食べて喜んでもらえたらいいなと思いました。

農業科学習で知った米一粒のありがたみ

豊川小学校 五年 山内 優輝

田植えの準備が整った水田。ぼく達の米作りのスタートの日だ。一歩足を入れると、泥のヌルツとした感じが気持ち悪かった。正直、よごれるのも嫌だった。おまけにヒルを発見。女子が「キヤーツ」とさけび声をあげる。何だか、大変な田植えになってしまった。それでも、指先につかんだ苗の束一つ一つに、「元気に育って、おいしくなつてね。」と祈りを込めて、丁寧にさし込んだ。植え終った苗達は、少しでこぼこに並んで、よその田んぼとは違ったけれど、どこか誇らしく見えた。支援員さんの顔も嬉しそうだった。

それからぼく達は、草取り作業やイオン水散布などの作業をし、稲の成長を見守ってきた。草取りは何往復も歩き、イオン水は匂いがきつくて、米作りの大変さを実感した。でも、それ以上に、水の管理や周辺の草刈りなど、支援員

さんの仕事はもっと大変なのだろうと思った。そうして秋、いよいよ稲刈り。稲はチクチクして嫌だったし、最初はかまの使い方もよくわからなくてうまく刈れず、イライラしながらの作業だった。そのうち、うまく刈れるようになってくると、刈り取る瞬間のそう快感は何とも言えず、収穫できる喜びもあり、とても充実した時間となった。本当に気持ちよかった。刈り取った稲は、お米に優しい天日干しの自然乾そう。

脱こくをして、ついに収穫祭。自分達でおにぎりを作り、支援員さんと共にごはんの味をかみしめた。ごはんの一粒一粒が愛しいとさえ思えた。米作りの大変さを知ったから、自分達で育てたものだからこそ生まれる感情だと思った。「味の無いごはんよりもパンのほうが好き。」と思っていた自分だったが、ごはんにもしつかりとした甘みがある事、香りがある事に気づく事ができた。これからは、茶碗に残ったごはん粒もそのままにしない。なぜなら、その一粒一粒に、作り手の愛情と苦労がまつていることを知ったから…。大切な事に気づけた農業科学習に感謝している。

作物の生命力

熱塩小学校 五年 菅井 日花里

今年、私達五年生は農業科で小豆とかぼちゃを育てました。小豆は六月に種をまきました。うねに移植ベラで穴を空けて種を三つづつまいていきます。芽が出て少し大きくなったら「間引」をします。なぜ間引をするかというと、元気な苗が他の苗に栄養をとられないようにするためです。小豆の花は小さくて黄色い花で、菜の花のようでした。十月になっていよいよ収穫の時期になりました。小豆は木のように枝がたくさんあり、インゲン豆のような細長いさやが付いていました。さやを収穫して、その中から小豆を取り出しました。今年はとてもよいできだったそうです。

一つぶの種からたくさん的小豆がとれてとてもおどろきました。そして、今まで何げなく食べていた物が小豆の種だということに気が付きました。昔から人間は収穫した物の中から来年の種を残して、その残りをいただくということをしてきました。そうやって、長い間作り続けてきたという事に作物の生命力はすごいと思いました。そう考えてみると、お米も種なのです。だからお米を土にまけば、芽が出てまたお米になるのです。こういう物を食べて私達は

成長しています。作物は「育てる・食べる」のくり返しなのです。種が無くなっても続かないし、種があっても育てる人がいなければ続いていきません。だから農業は大事であると思いました。

収穫した小豆は、あんこに変身しました。あんこ作りは、小豆がなかなかやわらかくならなくて時間のかかる作業でした。でも、あんこもちを食べた人が「おいしい」と言ってくれたのでとてもうれしかったです。また小豆は、「笑顔の赤飯配り」で赤飯に変身しました。私は赤飯が好きだけど、実際にできるところを見たのは初めてでした。赤飯をとどけたお年寄りにとても喜んでもらえました。「自分達が育てた小豆が笑顔に変わる」という事を経験できて、よかったです。来年も農業科でいろんな事を学んでいきたいです。

手作業での稲作

塩川小学校 五年 佐野 茜奈

「ガガガガガ」。
毎朝、トラクターのエンジンが鳴りひびく。私の祖父母の

朝は早い。なぜなら、私の家は農家で、たくさんの野菜を作ったり、親せきもお米を販売したりしている。もちろん、私もその様子を間近で見ってきた。だから、仕事の内容は、だいたい知っている。でも、今年は、初めての手作業での米作り。私は、とてもわくわくしていた。

五月。待ちに待った田植え。私が今まで見てきたのは、すべて機械での作業だった。しかし、今回は違う。農業科支援員さんからその方法を教えていただいた。簡単なように見えたが、とても難しかった。体のバランスをとるのが大変で、次の場所に移動するのも一苦労。こしを曲げて、一束、一束植えていくので、慣れていないこともありすぐにつかれてきた。汗をふきながら、作業が終わった田んぼを見ると、青々とした稲がとてもきれいで、つかれがふき飛んだ。

それから、観察にいく度に、稲の生長の速さを感じた。葉の数が増え、三から四本の束が何十倍にもなる。これが、植物の強さ、たくましさなんだと思った。色もこい緑から黄色に変わり、いよいよ実りの秋、収穫の時期だ。かまで思いつき引きながら、稲刈り。多くの束を脱穀機に運びながら、何ともいえない充実した気持ちになった。

家庭科の調理実習で、そのお米をいただいた。あまくて、

とてもおいしい。一粒、一粒かみしめながら、今までのことを思い出す。私は、「感謝」という言葉がすぐに頭に浮かんだ。こうやって、口にするまで多くの人の思いや苦労がたくさんあるということをこの体験で実感することができた。普段何気なく食べている給食、家での食事、作物を作って下さる方々に感謝の気持ちも決して忘れてはいけない。来年は、祖父母のためにも農業の手伝いをして、少しでも力になるぞと私は心に強くちかった。

農業で学んだ作物の大切さ

山都小学校 五年 浅見 露乃

私は、「いただきます」「ごちそうさまでした」というのが始めは、なんと言わないといけないんだろうと考えたことがありました。食べる時のあいさつなのだろうかと思っていました。

私は学校の農業でその理由が分かりました。それは二つありました。一つ目は食べ物はもともと生きもので生きてきたのに、それを食べる、命をいただくことだと分かりました。私は、食べ物はあるってあたり前だと思っていました。

でも、生きものが生きるためには必要だけど、植物なども私達と同じ生きものなどですから、感謝しないとだめだなと感じました。

もう一つ目は、食べ物はそれぞれ作ってくれた人たちなのですが、苦労して作ってくれたからです。少しカボチャのマルチの周りが草などがはえた時、草むしりをして、何十分もかかってつかれていましたが、本当に農業をやった時は、もつとつかれるからだと思います。私は、ずっと食べ物が食べてくらせるのはあたり前だと思っていました。でも自分達が食べている食べ物は野生でできているのではなく、いろんな人達が苦労して作っているのを学校でやった農業でよく分かりました。

私達は、作物などに命をいただいていることと、野菜などを苦労して作っている人達にきちんと感謝しないといけないことを忘れないで生きていかないとけないんだなということ、農業を通して思いました。

「米一粒にこめられた思い」

第一小学校 六年 早川 出海

これは、ぼくともち米と一緒に歩んできた軌跡です――。

四月、ぼくが初めてもち米に出会った時はまだ種の時でした。でも、種をまいてから、二週間経つと、小さかった種が苗に成長しました。うれしくてつい、

「大きくなったね。」

と、言っしまいました。すると、苗はじまんに葉を伸ばしました。その後も、苗はどんどん大きくなりました。

六月、大きくなった苗を、田んぼに植える「田植え」をするようになりました。一生けんめいやったので、どろだらけになったり、ずうっと曲げていたこしが痛くなったりしました。

「農家の人は、こんなに苦勞をして、お米をつくっているんだなあ。」

と、農家の人の苦勞が身にしみて分かりました。

十月、田植えをしてから四カ月が経ちました。植えたころの苗は、とても青々しかったのに、四カ月も経つと立派な稲になっていました。早速、稲刈りをするようになりました。一束、一束、丁寧に刈っていくと、全部稲を刈り終わった後の「苦勞」が「達成感」という心地よいものに変わっていきました。

こうして、もち米は、全工程が終わってぼく達の紅白もちとなってくれるのです。長いようで短かった農業科の一

時が終わりました。もち米をつくり終えた達成感のようなうれしい気持ちの中にちよっぴりさみしい気持ちが残りました。

ぼく達の食卓にならぶ「米」は、農家の方がとても苦勞して、何カ月も、何カ月も、長い月日を経て、ぼく達の食卓にならぶのです。ぼく達が当たり前のように食べている米一粒、一粒がとても大切なものなのです。ぼくが一番米づくりを経て、感じたことは、米の一粒が大切なこと。今日の夜ごはんも、あしたの朝ごはんも、昼ごはんも、米一粒、一粒を大切に食べようと思います。

大好きな農業ありがとう

第二小学校 六年 堺 愛純

「いただきます。」

今年の収穫祭。教室にひびいたその声は、床もぬけるくらいの元気な声でした。

六年生にとって、とうとう小学校最後の農業科です。私は農業科が大好きです。それも全部、校長先生のおかげです。校長先生は、毎日畑に来ては、大根、白菜、ミニトマ

ト、いもなど、いつもていねいに育てていました。そんな姿を見て、五年生の時から校長先生にあこがれて、農業が好きになりました。

今年は、じゃがいもを春から育てました。夏休みは、陸上の練習、部活などで大忙しでした。そんな夏休みの後半ごろ、陸上の練習が終わり、皆がくたくたになった後、じゃがいもほりがありました。私は、つかれているというのに、うれしくなりました。畑に飛びのるように入り、夏の暑い光に照らされながら、汗だくになるほど必死になってじゃがいもをほっていました。すると、校長先生にほめられ、またうれしくなりました。そして、それが夏休みの一番の思い出になりました。

次は、大根を育てることになりました。そのため、草や石を取り除くなどの世話をしました。月日が経ち、大根の収穫がありました。とっても大きい大根に育っていました。

私は、皆が学校で一生けん命勉強をしている間に、大根も必死になって、土の栄養をもらいながら育っていたんだなあとと思うと、とても感動してしまいました。そして作物は生きているんだなあと、実感しました。

いよいよ収穫祭です。私たちはじゃがいもと大根を入れてとん汁を作りました。食べる前に、先生がこんなことを

おっしゃいました。

「私たちは、食べる物の命をいただきます。だから、感謝しながらいただきますよ。」

と。この意味が六年生になってやっとわかった気がしました。

私は、大好きな農業科で命の大切さを学びました。そして作物への感謝の気持ちを持つことができました。ありがとう、農業。

祖父母を手本にして

関柴小学校 六年 高橋 結衣

わたしは、農業という言葉を目にすると、自然に「お米」という文字が頭の中に浮かんでくる。それは、きつと、わたしが家でも学校でも米作りをしているからだと思う。

学校での米作り体験は、今年で二年目だ。苗を発芽させて草取りをし、豊かに実った稲をかって、食卓にのぼるまでは、とても大変な仕事の連続だが、お米が口に入ったしゅん間、「やってよかったなあ。」という気持ちかわいてくる。作業をしていると、本当に自分一人だったら大変だろ

うなあと思うが、友達や支援員の方々と協力し合いながらやると、なぜだか楽しい気持ちがふくれあがり、大変さがうすれていく。みんなでやるといいなあと思う。

わたしは、家でも農業をやっているが、中心的にやっているのは祖母と祖父だけだ。わたしも手伝いをするが、あまりやらないうちに終わってしまう。祖母は、朝早くから畑仕事をしている。わたしが起きるころにはご飯を作っている。これが祖父母の習慣なのだ。わたしには、とてもできそうにない。すごい生活だ。朝食には、祖父母が心をこめて作ったお米や野菜が食卓に並ぶ。どれもとてもおいしい。お店で売っているものと比べて、米や野菜が断然おいしい。自分の家で作ったものがこんなにおいしいなんて、わたしはとても幸せなことだと思う。祖父母が農業をやっていたいなかったら、お米や野菜のおいしさやこの幸福感が無かったのではないかと思う。

わたしは、学校での農業活動では一生懸命にやっていたが、家ではどうだったのだろう。祖父母にたよりきりだったと感じる。苦労や努力がしみこんでいる作物を作っている祖父母から学んだことは大きい。これから、家での農業も一生懸命にやろうと思う。わたしも将来、自分で苦労し、汗を流して作ったお米や野菜を食べてみたいと思う。

だから、今から少しずつ農業をやっていききたいと思う。祖父母を手本にして。

手作業の大切さ

関柴小学校 六年 小椋 愛美

ある朝のニュースで、土を使わないでレタスを育てるという話題が取り上げられていた。すごい世の中になってきたなあと思った。また、田んぼや畑の農作業をロボットを使って行えるように実験しているところもあると聞いてまたまた、びっくりした。

わたしは、六年生になった。六年生は去年から引き続き米作りをする。二回目の米作りになる。わたしは、米作りが好きだ。理由は友達と楽しく協力して作業ができるから。そして、自分で育てた野菜や米が、よりおいしく感じられるからだ。米作りをやっていると、友達や農家の人たちとのふれあいや人の手で作る大切さを教えてくれる。農業離れや農家の人たちの高齢化が進み、農業の機械化が必要なのは知っていたが、わたしはやはり、手作業が大切なのではないかと感じる。少なくとも、未来に生きる人間たち

【農業科賞】

大豆を育てて

第一小学校 三年 夏井 翼

には、農業の歴史や苦勞を分かってもらう必要があると思う。古く弥生時代から始まった農業が、こんなにもわたしたちの食生活を支えていること、実際に体験するからこそお米や野菜の味がおいしくありがたく感じることなど：絶対にはずと伝えて行かなくてはならないことがあると思う。

学校で二年間、農業体験をして学んだことは、人の手で作ることの大切さや命をいただいているというありがたさだと思う。とても深い意味があるんだと思う。

機械化が進んでいくのは止められないことかもしれないけれど、人間の手で作られているという大切な意味をどうにかして残していったほしい。

わたしの祖母は、畑を作っている。今まではあまりしていなかったお手伝いをしてみようかと思う。今、わたしは、農業に触れてみたいと強く感じている。

ぼくは、農業科で大豆を育てていました。

ぼくたちが大豆のまめを植える作業を行う前に、とよこさんという人が大豆を育てることで大切な事や、まめの植え方を教えてくれました。

そして、ぼくたちは、「ひでん」という豆を植えました。それから、二週間ほどたったら、ぼくたちは大豆のなえを畑に植え直しました。

大豆を畑に植え直してからぼくたちは、週に二、三回その合の時間に、畑に行つてなえに水やりをしました。

たまに、畑に草がいつぱい生えてきたときは畑に行つて大豆のわきに生えているざつ草をひっこぬいて草とりをしました。

それを、二回くらいくりかえしたら大豆も自分で水分を土から見つけるようになったり、草とりをやったおかげで大豆だけにえいようがいくなったりして、くきがぐんぐんのびていくのがうれしかったです。

大豆の水やりや草とりを終わらせてから二、三週間後に大豆のしゅうかくに行きました。

大豆のしゅうかくの前日に雨がふってしまったので、長ぐつをはいて畑に行きました。

大豆のしゅうかくは大へんで力づくで大豆のくきを土からひっこぬいたり、いろんなところについている大豆のさやをとったりする作業を、何回もくりかえしたのでとてもつかれました。

大豆をしゅうかくしたことをお母さんに話すと

「もってこなかったの。」

と言われました。

大豆をしゅうかくしてから一週間後ぐらいに先生がゆでたえだまめをみんなにくれました。虫食いがあつて、食べられる数がちよつとへったけど、えだまめの味はいつもの倍おいしかったです。

楽しかった農業科。

第二小学校 三年 大島 夢音

ぼくは、農業科でじゃがいもを育てました。毎日、畑に

行つて水をやりました。水をやるだけの事だけど、とてもたいへんです。水は朝と昼休みにあげました。一週間くらいすぎると、めがでてきてすごうれしかったです。毎日、水くれをするたびにぐんぐん大きくなっていつて水くれがとても楽しみでした。

いよいよ、じゃがいもがほれる日がきました。子どものじゃがいもでも根が長いので先生に手つだってもらいました。根からどんなじゃがいもがくつついてきました。大きいじゃがいも小さいじゃがいもサイズは、いろいろあつたけど、はじめて自分でそだてた食べ物ができた時のうれしさは大きかったです。じゃがいもをほる時は、はんのみんなで力を合わせて、ほりました。

そだてる時もほる時にもみんなできょうりよくする事が大切ということが分かりました。

みんな育てたじゃがいもでサラダパーティーをして学校で食べたサラダは、さいこうにおいしかったです。みんな毎日水をやり、そだてたじゃがいもをつかつて、みんなで作ったサラダは、今までで一番おいしく感じました。

ふだん毎日食べている物ひとつひとつが農家の人がくろうして作っている事が分かりました。これからは食べ物をむだにしないで作っている人にかんしゃしながら大切に食

べたいと思っています。じゃがいもを育てて食べれるようになるまでいろいろなことをすることができてべんきょうになりました。また来年、どんな作物を作って食べることができるとか今からとても楽しみです。

大事に育てた大豆

松山小学校 三年 上北 晁稟

私たちは、大豆を大切に育ててきました。三年生みんなが、六月に、たねを植えて畑に行きました。たねが赤かったのも、さいしよふしぎに思いました。そして、畑の先生が、「たねが赤いのは、鳥にねらわれないように赤くそめたんだよ。」と、言っていたので、本当に、赤くそめたいなかったら鳥にねらわれるのかふしぎに思いました。

それから、ざっ草がいっぱい生えてくるので、取るのが大へんでした。たねを植えた時に、一回水やりをしました。でも、その後水をやらなくてもどんどん、大きくなるので、元気な大豆だと思いました。

大豆は、一つのたねから、いっぱい生えてくるので、びっくりしました。一つの所に二つのたねを植えたの

で、ふさふさになりました。大豆は、えだ豆がかれて、大豆になることが分かりました。

そして、十月に、とうふ豆をしゅうかくしました。畑の先生が大豆の取り方を教えてくれました。それは、「地面にたたきつけて、やってみるといっぱい取れるよ。」と、教えてくれました。その通りやってみたらいっぱい取れました。

教科書の「すがたをかえる大豆。」をべん強しておからやとうふの作り方が分かっていたので上手にできました。ほかにも、なっとうやきなこを作れるのかためしてみたいです。

畑の先生やとうふ作りを教えてください先生がいなかったら、大豆もとうふも作れなかったので、いってくれてよかったです。

とうふ作りは、大へんだったけど、おいしくできたので、うれしかったです。

お父さんやお母さんがとうふを食べて、「おいしいね。」

と、言ってくれたのでよかったです。

これから、いろいろなものを作ったり育てたりすると思います。みんなに美味しいと言われるように草むしりなど

をいっしょうけんめいやって上手に作れるようにしたいです。

楽しい大へん農業科

上三宮小学校 三年 飯野 隼斗

ぼくは、今年はじめて農業科の学習をしました。ぼくの家でも色々な作物を作っている所以この農業科がとても楽しみでした。

五月にさつまいもと大豆のなえを植えました。さつまいもはひろひろのなえだし、大豆も小さくて本当に大きくなるのかなと心ばいになってしまいました。

夏には、ものすごくざつ草がはえていました。だからぼくたちは一生けん命ざつ草を取りました。暑かったのです。くさんあせがでてきました。でも、さつまいもと大豆のためにがんばりました。

十月には、しゅうかくをしました。さつまいもは大きいのがつぎつぎと取れたのでうれしかったです。あまりに大きいものが取れたときは思わずわらってしまいました。大豆は、さやからいっぱいでてきたのでびっくりしました。

しかも、あんなに小さいなえからこんなにたくさん大豆が取れるなんて本当におどろきました。

ぼくの家では、色々な作物を作っています。米やアスパラなどの野菜です。ぼくは、いねかりをてつだったことがあります。こしがいたくなって手もつかれました。こんなつかれることをやっている農家の方は大へんだなと思いました。農家の方は、しゅうかくだけでなく、草むしりや田んぼ、畑もかんりしていかなければいけないので、とてもくろうしているなと思います。

ぼくの家の人畑仕事はとても大変そうです。春は、畑をたがやしたりなえを植えたりしています。夏と秋は草むしりやしゅうかくをします。冬は休みですが他は休みなく毎日仕事をしています。そのすがたを見てぼくは大へんだなと思ったのです。

ぼくは、はじめての農業科で、しゅうかくの楽しさ、うれしさが分かりました。でも、その楽しさやうれしさのかげにはくろうや大へんさもあるのだということがよく分かりました。

ありがとう、大豆。

豊川小学校 三年 折笠 夏希

三年生で大豆を作りました。まずたねをうえました。これからどうなるか楽しみでした。次に、かんさつをたくさんしました。見るたびに葉がふえ、大きくなっていく大豆ってすごいなあと思いました。そしていよいよしゅうかくです。一回目は、えだ豆です。ゆでて食べました。いつも食べているえだ豆よりおいしかったです。みんなでおいしいおいしいと言いながら食べました。

そして二回目のしゅうかく。きなこを作ります。まず、からからにかんそうさせて、豆ぶちをしました。豆とごみを分けるのが大へんでした。さいしよは手でやっていただけなかなか進まないのです、とうみを使いました。はじめて使ったけどおもしろかったです。あつというまにごみがなくなりしました。次に、豆をいりました。いるということがどういうことかはじめて分かりました。いいにおいがしてきて思わずえ顔になりました。その後豆をかんそうさせて、石うすを使って豆をひきました。ひくのは重かったけど、みんなでやったら軽くなりました。そしてついに、きなこになりました。おいしいのか心配だったけど、食べてみた

らとてもおいしかったです。友だちと食べたきなこは、さ
いこうでした。

家を持ちかえました。家の人に食べてもらったらみんな口をそろえて、

「おいしい。」

と言ってくれました。とてもうれしかったです。

この学習を通して、

「おいしい。」

と言ってもらえるために農家の人は、たいへんな仕事をしているんだと分かりました。そして、

「おいしい。」

と言ってもらえると、こんなにうれしいことも分かりました。わたしはこれから、食べ物を大切にありがたういた
だこうと思います。ありがとう、大豆。

野菜作りの苦ろうと感しや

慶徳小学校 三年 佐藤 美心

「いったきまあす。」

わたしは、野菜をふつうに食べていました。だけど、学

校で農業科を学んで、野菜のさい培には苦ろうが多いことが分かりました。

三年生は、はじめてジャガイモを育てることになりました。わたしはジャガイモが大すきです。さいしよいもを植える時、わたしはジャガイモは、一、二か月でできるだろうと思っていました。だけどそれは、まったくの大ちがいでした。ジャガイモは、一か月もさきにやっとめばえしました。わたしは心の中で思いました。「ああよかった。病気にでもなったのかとびっくりしたあ。」そしてジャガイモはどんどん大きくなりました。その後十九日ぐらいたつと、葉が出て、二リットルのペットボトルぐらいになりました。たくさんくきがある所の何本かのくきを取って、芽かきや土よせをしてお世話をしました。さらに、くきにはえた花を取りました。

そして、花を取って、やく三か月後、ついに、いもほりの日が来ました。しえん員さんにも、たくさんのかを教わりながら、ほり始めました。わたしは、思いました。「たねいも一つから十こもできるなんてすごい。」すぐにも調理して食べたくなりました。畑のおく深くまでジャガイモはなっていました。土の中には、虫がたくさんいました。「虫がいるからいい土だ。いい土でジャガイモが育

ったということは、ぜったいおいしい。」と思いました。

みんなでほったジャガイモを調理しました。大きいものを半分に切ってみると、黄色くておいしそうです。それをゆでて、食べました。もちろん、とてもおいしかったです。「おいしいね。うまいなあ。」

という声が、家庭科室にひびきわたりました。

野菜を育てて、わたしは思いました。野菜を食べる時は、感しやして食べようと。これから、野菜をたくさん食べて、けんこうで元気いっぱいになりたいと思います。

おいしい野さいを育てたよ

熱塩小学校 三年 瓜生 琴子

わたしは、夏にたねをまいたダイコン、カブを十一月にしゅうかくしました。よしまささんとすがいさんに教えてもらいながらやりました。

さいしよにダイコンをぬきました。ぬいてみたら、人間の足のようなダイコンがぬけました。おもしろいダイコンはとてもたくさんはえていたのでびっくりしました。大きいダイコンもたくさんありました。その長さは、わたしの

うでの長さぐらいでした。このダイコンは、農ぎようまつりでおとなの方たちのところで二位になりました。すごいと思いました。

次にカブのしゅうかくをしました。カブをぬいてみたらわたしの頭より大きくてびっくりしました。カブをもつていたらうでがいたくなってきました。なかには、小さなカブがあつてそれを見せたら、

「それは、しっぱいだ。」

といってわらっていました。けれど実は小さいのに葉はふつうのカブのように大きかったです。葉にえいようがいつてしまったのかなと思いました。

わたしが、大きいカブをはこんでいるときに友だちがカブを食べていたのでわたしも食べさせてもらいました。そのカブの名前は、ゆきわらしです。わたしが食べていたときによしまさんがいたので、

「あまくておいしいです。」

と言ったら、

「やっぱり心をこめて育てたからだな。」

と言っていました。たねをまいたときには、

「作ると育てるではちがう。野さいは育てるんだよ。」

と何回も教えてもらいました。

「この畑には、農薬を使っていない。」
とも言っていました。

自分たちが育てた野さいが、どうしておいしいのかが分かりました。来年も心をこめておいしい野さいを育てたいと思います。

しえんいんさんに教えてもらったこと

加納小学校 三年 山本 知佳

わたしは野菜作りプロジェクトを四年生とはじめて行いました。一番さいしょに作ったのが、じゃがいもです。

しえんいんさんにじゃがいものことを教えてもらいました。

「じゃがいもは、トマトの仲間だよ。」

おどろきです。じゃがいもの花の後にできた青い実をはさみで切ってみたら、たしかにトマトにっていました。これでじゃがいもがトマトの仲間だということを感じかんしました。

一学期の終わりがらに植えたとうもろこしはなんと、予

ていでは夏休みの後にしゅうかくするのに、夏休み中にもうもろこしが大きくなって、夏休み中にしゅうかくすることになりました。

しえんいんの岩下先生が、

「とうもろこしはイネの仲間だよ。」

と教えてくれました。とうもろこしはイネの仲間だとはじめて知りました。

岩下先生が、

「一番上の毛がおしべで、とうもろこしについている毛がめしべだよ。おしべからめしべに花ふんがふつて来て一つぶ一つぶに一本めしべがついていて、花ふんがふつたらとうもろこしのつぶは黄色くなるよ。」

と教えてくれました。

とうもろこしの毛に名前がついているなんて知りませんでした。

大こんぬきで気づいたことは、それは大こんとにんじんとごぼうは中にたねがないけれど、オクラやトマトなどは、中にたねがあるからふしぎだなあと思いました。だから大こんやにんじんはいつたねが取れるのかなあと思いました。しえんいんさんに「何が何の仲間。」「ぬきかたはこう。」「もぎかたはこう。」「とりかたはこう。」「洗いかたはこ

う。」といろいろなことを教えていただきました。今ど四年生になったら、来年の三年生に教えてあげたいです。

とうもろこしのしゅうかくでおぼえたこと

加納小学校 三年 佐藤 ひな

とうもろこしのしゅうかくを八月十八日にやりました。しゅうかくの時にしえん員の岩下さんが、

「上の方が実がいつぱいつまっているんだよ。」

と言いました。わたしは、その言葉にぎ間を感じました。そしたら、岩下さんが、

「それは、とうもろこしは、上についている花ふんが実一つ一つについている毛に風で落ちて実になる部分が少しずつ大きくなっていつぱいつまっているんだよ。」

と言いました。それで、わたしのぎ間の答えが出ました。その後のしゅうかくの時に一番上のとうもろこしのかわを少しむいてみたら本当に実がいつぱいつまっていました。その時にわたしは、しえん員さんはさりげなく大事なことを言っているから、きちんと話を聞こうと思いました。

わたしは、そのほかにも感じたことがあります。それは、

しえん員さんへの感謝の気持ちです。わけは、しゅうかくでとうもろこしが、くきの部分からとうもろこしの下の部分がとれなかったから、しえん員の遠藤さんが取ってくれたからです。わたしはしえん員さんにいろいろなことをいっぱいやってもらっているのです、全部自分たちでやるのはむずかしいと思うけど、これからは少しでも自分たちでやれることをふやしたいです。とうもろこしをはこぶようなとうもろこしのしゅうかくだけでなく、大根のしゅうかくやじゃがいものしゅうかくの時もかんたんな仕事ばかりやっているのです、人にやくだつ仕事やくろうする仕事をやりたいです。

わたしは、このとうもろこしのしゅうかくでしえん員さんへの感謝の気持ちと農ぎょうの大へんさを知りました。四年生になってからもこれからある農ぎょう科のべん強でも自分たちですすんで人にやくだつ仕事をしたり、大へんな仕事もめんどくさがらないでやりたいです。

がんばって育てたサツマイモ

塩川小学校 三年 渋谷 平

ぼくは、野さいを育てる事が好きです。それは、今年の

春から家の畑で野さいを育てたからです。毎日、少しずつ大きくなる野さいがふしぎで好きになりました。ナスやトマトは、なえを植えます。ほうれん草や枝豆は、たねを植えます。ぼくは、弟といっしょに夕方になると野さいに水をあげました。でも、水をたくさんあげないほうがおいしく育つ野さいもあると、お父さんに教えてもらいました。ぼくは、植物には、水がひつようだと思っていたので、びつくりしました。水がないほうが、味がこくておいしい野さいになるそうです。

三年生は、じゅぎょうでサツマイモを育てると先生に聞きました。家の畑では、サツマイモを育てた事がないので楽しみでした。

やっとサツマイモを植える日が来ました。サツマイモは、なえを植えるそうです。でも、サツマイモのなえは、ナスやトマトのなえとは、ちがいました。ぼくの知っているなえは、土からまっすぐにのびていました。でも、サツマイモのなえは、土にはえていません。根も少ししか生えていません。まるで、かり取った草のようでした。こんななえでサツマイモが実るのかなと思いました。

サツマイモのなえは、他のなえとちがって、ななめに植えます。そのほうが実が実りやすいそうです。水は、少し

でいいそうです。

サツマイモは、土の中で実るのでいつ収かくするのかわかりませんでした。先生に聞いてみたら葉が来てきた時が収かくの合図だと教えてもらいました。収かくに行ったら、サツマイモがたくさん育っていました。弱々しいなえから、大きなサツマイモがとれてびっくりしました。水も少ししかあげてないのに、大きくなるなんてふしぎに思いました。

土の中で育つ野さいは初めてだったけど、見えなくても大きく育っておもしろかったです。野さいを育てるのは、おいしいし、楽しいなと思いました。来年もいっぱい作ります。

黄色い宝石ポップコーン

姥堂小学校 三年 川上 はづき

わたしは、今年、ピーマン・トマト・ポップコーンなどの野さいを二年生といっしょに育てました。

その中で、育てることが一番楽しかったのは、ポップコーンでした。

楽しかったけれど、ポップコーンは、育てることがとても大変でした。

わけは、カラスなどの鳥が種を食べてしまったり、水やり・草むしりなどが大変だったからです。

しゅうかくする時期には、実がどうにかなり、しゅうかくできました。

全部実を取ったら、くきをひっぱって取りました。でも、なかなかとれないので、くきをおることにしました。おろうとしても、なかなかおれません。だから、慎央君と陽平君は、スコップを持ってきて、スコップで切ろうとしましたが、やっぱり切れず、みんなで、

「つかれるなあ。」

と言っていました。そんな時、わたしは、少しだけちがうことを考えました。ちがうこととは、「これが植物の生きる力なんだ」ということです。

わたしたちは、こんなにすごい生きる力を持っている植物や生き物から、命をもらってえいようをたくわえて生きているのかと思いました。そしたら、少し元気ができました。

そして、しゅうかくやくき取りが終わると、いよいよ調理実習です。

調理実習では、ポップコーンにねつをくわえて、えい画館で食べているような、ポップコーンを作りました。

ポップコーンを食べると、ほっぺがおちそうなくらいおいしかったです。だから、植物たちに、

「ありがとう。」

を言いました。これからは、すききらいせずにも何でも食べたいです。そして、来年の農業科では、草むしりや水やりの仕事を、今年よりもパワーアップしてやりたいと思います。

カボチャを育てて

第一小学校 四年 鈴木 啓也

「おいしい。あれ、不思議だなあ。」

今までかぼちゃはきらいだったはずなのに。学校で友達と育ててきたかぼちゃを食べたとたん、かぼちゃが少し好きになったような気がしました。きつと、ここまで大きく育てるのに、数えきれないほどの苦労を重ね、愛情を注いだからなのかなあと思いました。

しゅうかくの日、ぼくにはびっくりして強く印象に残っ

たことがあります。それは、苗を植えた時とはくらべることができないほどかぼちゃが生長していたことです。しゅうかくした実は、一つ一つが大きく、その数は、なんと百こをこえました。苗を植えた時より生長し、大きく豊かに実を結んだことにおどろきました。生き物は、太陽や水や動物や植物、いろいろな物や生き物が助け合い、ささえ合い、関わり合って生きていくのだなあ、感動しました。だからこそ、きらいだったはずのかぼちゃが好きになったのだと思います。

しゅうかくの作業は大変でした。まだ花がさいている所には、はちがぶんぶん。おまけにかがたくさん。けれど、そこから、生き物は助け合って生きている、ということが分かりました。

農業。それは、ただ植物を育てるという事ではない、植物に対する愛情であり、植物などの助け合いの一つ。ぼくは、そのことを知って、「農業科って、やりがいがあつて、感動できるんだ。」と思い、なんだかうれしくなりました。ぼくは、このことをぜつ対に忘れないで、これからも農業科や家庭菜園で、いろいろな植物を育てて感動をふやしていきたいと思いました。

楽しかった農業科

第三小学校 四年 小野寺 尋音

五月の初めにジャガイモのたねいもを植えました。農業支えん員の人たちが切ってくれた方を下にして土の上に置き、ひ料を周りにまきました。ぼくは、

「早く大きくなあれ。」

と言いながら、ひ料をまきました。となりにいた二年生は、「いっぱいとれますように。」と言いながら、ひ料をまいていました。

ジャガイモは、さつまいもとちがつて、毎日水をやる必要がありません。だけど、ぼくはジャガイモが気になって、時々畑に見に行きました。二週間ぐらいたってジャガイモのめが出た時は、（よっしゃ。）と思いました。そして、思わず学級のみんなに、

「ジャガイモのめが出たよ。」

と、大きな声で教えました。すると、みんなで見に行こうということになり、畑に見に行きました。毎年ジャガイモを植えていても、やっぱりめが出たのを見るのは、特別にうれしいと思いました。ジャガイモは順調に大きく育ち、

三週間ぐらいたつころには、葉っぱがもつと大きくなっていました。ぼくは、ジャガイモの重さコンテストで優勝できるくらい大きくなつてほしいと思いました。

八月の収かくでは、ものすごく大きいものはなかったけれど、たくさんのジャガイモがとれました。ぼくがとった変な形のジャガイモは、はん長が『みかくにん生物』と名付けました。はんのみんなで大笑いしながら、ジャガイモをほりました。うれしかったです。

収かく祭では、ぼくたち四年生が中心となって焼きいものじゅんぴをし、五・六年生にカレーを作ってもらいました。支えん員さんが、「自分で作った野菜を自分で食べることが一番幸せなんだよ。」と言っていた意味が分かりました。できるまでに四か月もかかったジャガイモは、おいしかったです。農業は、やってみると、とっても楽しいです。来年もみんな楽しく活動したいです。

作物をしゅうかくする喜び

山都小学校 四年 齋藤 水月花

「水やりなんてめんどくさいなあ。」

夏休み前のころ、ポップコーン育てをしていた。暑い外に出て、ポップコーンのなえに水やりをする当番だった。

「こんな簡単なこと、すぐ終わるよ。」

と、私はさつきと終えて教室に帰ることがよくあった。

次の作業は、なえを畑に植えること。ビニールポットから外して、畑にしいてあるビニールシートに穴をあけ、そこに植えるだけ。

「楽な作業ばかりで、本当にいいポップコーンになるのかな。」と心配しながら作業した。

夏休みの中旬、観察しに行くと、ポップコーンはなえの十倍の高さまでのびていた。

「えー！」

思わずさけび声をあげるほど高くて、もうびっくりするどころではなかった。「もつと心を込めて水やりや世話をしなくちや。」私は作物の成長に教えられた。

いよいよしゅうかくの日がやって来た。ここからが力仕事だ。ポップコーンを実の根元から折り、全部実が無くなった茎を根元からぬく。大変だったが、みんなで協力してやったらあつという間だった。

「あー大変。」

畑に何もなくなつた後、初めてしゅうかくが楽しく感じた。

「どうしてだろう。今まで何も感じなかったのに。」

このしゅうかくの喜びは、協力の大切さを感じられたからだと思う。水やりも、なえを畑にうえる作業も、みんなといっしょにやるようになってから楽しくなってきた。みんなが協力したからこそ、こんなに喜びが感じられるんだ。はじめは何も感じなかったけれど、ふり返ってみれば、全部協力し合つたことばかりだった。みんないっしょにやつたことばかりだった。この協力の大切さを、他のことにも生かしたい。なぜなら、その分だけ喜びが感じられるから――。

里いも里いも大きくなあれ

高郷小学校 四年 長水 萌

「大きくなつてね。」

春に、畑で四年生、十四人が里いもを植えました。みんなが話し合い、その中で里いもを育てる、と言うてい案がありました。そのてい案で里いもを育てることにしました。まずは、うねを作り、里いものなえを植えました。うねができたなら、ビニールをかけました。なえを植えてから、

「大きくて、おいしい里いもになってね。」

とわたしは、言いました。これから大きくなっていくと想
ぞうすると、わくわくしました。植えたあとの日から、水
あげをしました。水あげをしに来て見ると、元気にしてい
ました。少しずつ、少しずつ育っていきました。水あげを
しながら、

「大きくなあれ。」

と言っていたからでしょうか。ぐんぐん育っていきました。
元気で大きな里いもにするためにはどうしたらいいのかな
とわたしはなやんでいました。わたしは、

「やっぱり水をたくさんあげたら、いいのかな。それとも、
ひりょうをあげたらいいのかな。」

となやんでいました。その中から、大切に育てることを選
びました。里いもにやさしさをあげるように水あげをした
り、みんなで草むしりをしたりしました。秋になりました。
とても大きくなり、わたしのせをこすぐらい大きくなって
いました。先生が、

「一かぶほってみよう。」

と言いました。食べるのがとても楽しみでした。一かぶほ
って、別な日に、料理を作りました。里いもの皮をむくの
が大変でした。また別の日に、里いもを三年生とほりまし

た。料理を試みたら、とてもおいしかったです。野菜は、
みんなを元気にしてくれる食べ物です。里いもとおして、
わたしがわかったことは、農業でみんなが、え顔になって、
喜びがわかることです。これからも、みんなをえ顔にした
いです。

農業のすばらしさ

松山小学校 五年 原 柚葉

私達五年生は、幼稚園児と一緒にさつまいもを育てるこ
とになりました。さつまいもを育てるのはまず、苗を植
えることから始めました。苗をきずつけないように両手で
そうつと、やさしく植えました。それは私が思っていた以
上に少し、むずかしい作業でした。

「どのくらいの大きさの実ができるのかな」

「早く秋にならないかな」

とワクワクしていました。

草むしりもしました。ずっと同じ体せいで作業をするの
は、こしがいたくなりました。農家の人など、作物を育て
ている人は、これをよくやっているのだなと思うと、改め

て

「すごいな」

と思いました。

そしていよいよ秋になりました。土をスコップでほるとそこにはたくさん立派なさつまいもが実っていました。それを見たみんなは、大喜びしました。私は、さつまいもがいっぱいあるので、はりきってほっていたら

「ザグッ」

と何かにささった音がしたので見てみると、さつまいもが真つ二つに分れていました。真つ二つに分れたのは残念だったけど、たくさんとれたので、

「みんなががんばって育てたかいがあつたな」
と思いました。

その後は、園児と一緒にほったさつまいもを食べました。外は赤むらさき色、中はきいろのとても良い色のアツアツさつまいもは、最高でした。

自分たちで作ったさつまいもを食べている時のみんなの笑顔は、私に農業のすばらしさを教えてくれました。

協力・関わり

第三小学校 五年 若菜 愛実

わたしたちは農業でもち米作りをしました。田植えも、いねかりもみんな協力してやりました。もち米以外でも協力してやりました。そうやって協力しながらやっていくにつれて、関わりも深くなっていました。

わたしが農業科の学習で思ったことは、協力してやると何でも出来るんだなあとということです。一人では出来ないこともみんなであれば出来るのでそう思いました。とくに農業の学習ではそれを強く思いました。理由は、草むしりなどみんなであれば早く終わるし、きれいになるからです。早く終われば時間短しゆくにもなるし、きれいになれば畑の作物もよく育つようになると思います。また、関わり方も深くなってきたと思います。協力することでみんなとの関わりも深くなるし、みんなとも仲良くできると思います。いねかりの時は、みんな協力してかりました。そこで思ったことは、早く終わった人がまだ終わらない人の手伝いをしていたことです。これも、協力だと思いました。そうしたこと、いねかりもすばやくできたと思います。いね

をかって、運ぶときもみんなで運んで全部運べたので、協力してやったからだと思いました。全校生での野菜作りも協力してやったからできたんだと思います。

これからも、協力してできないこともできるようにしていきたいです。農業では特にみんなで協力して作物を育てたいです。そして、人との関わりももっと深くなっていくといいなあと 생각합니다。来年は六年生なので、みんなをまとめながらも、協力して作物を育てたいです。がんばりたいです。

米作りを通して

慶徳小学校 五年 小澤 沙也加

「えっ、長ぐつをはかないの。」

初めて田植えをする私はびっくりしてしまいました。しかし、実際に田んぼに入ってみると、気持ちよさを感じる事ができました。私はこのことだけでなく、一年間米作りをしていろいろなことに気づきました。

まず、七カ月もイネの世話を続けなければならないという事です。その間、イネミズゾウムシなどの害虫や、カ

ビの一種であるもち病に気をつけなければなりません。また、イネがどれぐらい成長したのか、分けつはどれぐらい進んだのか、農家の人々は見回りを続けながら細かい所まで観察し、水の深さを調節したり肥料を追加したりして、イネを大事に育てています。

次に、イネの成長の速さと素晴らしさです。私は学校の帰り道や農業科の時間にイネを観察して記録をとりました。田植えの日、わずか十六センチだったイネの苗は、九月二日には、一メートル十四センチに成長していました。また、一粒の種モミが成長し、百二十個のモミになることもわかりました。ほんの一部しか米作りを経験していない私ですが、驚かされる事がたくさんありました。

最後に農家の人々の気持ちです。稲刈りの日、イネは大きく成長していました。そのため、なかなかイネの束がつかめなくて苦労しました。しかし、何回かやっているところがつかめてきて、一回で刈り取ることができました。その時のイネの束の重みに何とも言えない気持ちのよさを感じる事ができました。また、収穫感謝祭では、私たちが育てたお米を使って全校生でおにぎりをつくって食べました。私もみんなも笑顔でした。米づくりは大変手間のかかる仕事です。しかし、農家の人々は米作りのやりがいや、

お米を食べてくれる人々の笑顔があるからこそ、がんばることができのだと思います。

私は来年もたくさんの方に気づくために、しっかりと米づくりをします。

ポップコーンを育てて

姥堂小学校 五年 大泉 海翔

ぼくは、ポップコーンのたんとうでした。たねを植える前に、先生に「一メートル以上のびるよ。」と言われて、ぼくはびっくりしました。そして、植えてから一か月くらいで芽がでてきたので、ぼくとたくむ君で喜びました。この日から、せわに火がつかしました。毎日水くれをして、ざっ草もたまにとりました。水くれをしながら、ぼくは毎日「はやくポップコーン食べたいな。」と、思いながらする水くれは、とても楽しいものでした。なぜなら、ぼくの中で農業の一番の楽しみは、作った作物をみんなでおいしく食べることだからです。

夏休みになるちよつと前に、ポップコーンのなえに、あぶらかすをまきました。あぶらかすをまくと、なえがのび

ると本に書いてあったので、ぼくは、「どこまでのびるかな。」とわくわくしながらまきました。

夏休みになってから、水くれをしに学校にいくと、なえに変化がありました。夏休み前はぼくと同じくらいの高さだったのが、夏休みにはぼくより高くなっていて、しかもなえに実があつて、少しふくらんでいました。ぼくは、あまりのうれしさに、「やったー。」といいました。夏休みが終わるころには、高さは二メートルぐらいで、実も大きくなっていました。九月の後半に、ポップコーンの実をしゅうかくして、みんなで皮をむきました。くきもとりました。カラスに食べられてしまつて、あまりとれませんでした。それだけおいしい実だったんだと思います。

ぼくが、ポップコーンを育ててわかったことは、農業は、食べることも楽しいですが、つくることが一番楽しいことを、あらためて知りました。

みんなで協力し合つた稲刈り

駒形小学校 五年 鈴木 瑞穂

「うわーこんなにー。」

と、稲刈りをしに田んぼにやって来たぼくは、思わずさげんだ。稲刈りは楽しみだったが、手刈りだと思うと、とても大変そうだったからだ。

今日はぼくにとっては初めての稲刈りだった。手で刈り取る作業をする前に、支援員さんに刈り方と束ね方を教わった。さっそくそれをまねして、勢いよくかまを動かすと、「ザクツ、ザクツ。」

と、快い音色を立てて切れた。かまの刃はするどくノコギリのような刃になっていた。とても切れるので、自分の手を切らないよう気を付けようと思って刈った。刈った稲を束ねる時は、かまをどこかに置かなくてはならない。ぼくはどうしようかと思った。すると、支援員さんに、

「かまは土にさしておくんだよ。」

と、言われた。ただ置いておくとかまを持つ時すぐ見つかからないし、ふむとあぶないからだった。その通りにしながら、ずっしり重い稲を刈っては束ねる事は思った以上に大変だった。それを一時間かけてやった。

その活動の中で特に良かったと思う事がある。それは、自分の所が終わったら他の終わってない人を手伝っていた。つまり、協力してやっていたという事だ。一人ではできない事が、友達といっしょにやるとどんどんはかどっていく

のは、おもしろかった。自然と協力できたのがとても良かった。

全て刈り終えて、それまで黄金色に染まっていた田んぼに切り株が規則正しく並んでいるのが見え、初夏の飯豊山がきれいに見える日にやった田植えを思い出した。あの日は、どろだらけになりながらやって楽しかった。

いろいろな手を加えて稲が育ち、稲穂が実り、収穫まで、米作りの大変さと苦労を初めて知る事ができた。これからは、農家の人の気持ちを考え、感謝し、日々の生活を送ろうとぼくは、自分に誓った。

小学校最後の農業科で学んだこと

第二小学校 六年 羽入 彩乃

「いただきます。」

は、いつも当たり前のように言っている言葉です。私は、最後の農業科で初めて「いただきます」の本当の意味を知りました。

五月、ジャガイモを半分に切ったものを土の中にうめました。何日かすると芽が出てきて、とてもかわいかったで

す。しかし、楽しいことばかりではありませんでした。暑くてとても辛い時に、私の苦手な草むしりをやったり、じやまな石を取ったりしました。夏休み、ジャガイモを収穫しました。今までの苦労があったけれど、なぜか不思議と笑顔になってしまいました。九月、大根の種をうめました。大根の種はとても小さかったです。収穫するとき、

「あんなに小さかったのにこんなに大きく、太く、そしてこんなに立派に育ってしまうの？」

と、とてもびっくりしてしまいました。ジャガイモも、大根も、収穫する時は今までの苦労が全てふき飛んでしまい、農業科はとても楽しかったです。そして、今まで作ってきたジャガイモと大根を使ってとん汁を作りました。とん汁を食べる前、私は、

「いつも、当たり前のように食べている野菜などの食べ物、は、農家の人が汗水たらして、一所懸命つくっているものなんだ。だから、『食べる』ということは、生命をいただくということなんだ。だから、食べ物を残したりしてはいけないんだ」

と、農業科に気づかされました。そして、また、農業科の授業は「命の授業」でもあることが分かりました。みんなから始めた汁は、とてもおいしかったです。

私は、最後の農業科で学んだ『いただきます』の大切さ」をこれからの生活に生かしていきたいです。これから、農業が体験できたら進んで行い、喜多方の農業のすばらしさをみんなに伝えて、みんなが農業が好きになってもらえるよう、がんばっていききたいです。

大根からあふれる笑顔

第二小学校 六年 石原 大地

「大根の種ってこんなに小さいんだあ。」

から始まったぼくたちの農業。こんなに小さい種にたくさん笑顔がつまっているなんてこのころのぼくには、まだ分からなかった。

九月、大根の種を畑に植えるのは初めてだったのでとてもワクワクしていた。畑に穴をほり、ていねいに種を植えた。こうやって楽しく大根を植えられるのは、八月の苦労があったからだ。

最初は草むしりから始まった。あまりにもボウボウだったのでやるのがいやになった。でもそんな時、友達が「いっしょにやろうぜ。」

と言ってくれたので、協力してたくさん草をぬいていくことができた。終わったころには、最初とは比べものにならないくらいきれいになっていた。そして、なぜか大変さよりも達成感の方が強かった。これで、おいしい大根ができると思うととてもうれしくなった。

次は、畑の石拾いをやった。虫がたくさんいていやだったけど、大根のために一生懸命石を拾った。石を拾い終わって見た畑は、とてもかがやいているように見えた。

そして、ぼくたちの畑からいよいよ大根を収穫する日がきた。ぬいてみたら、とても大きい大根に育っていた。こんなに大きくなったのは、自然のおかげと、みんなで協力したからだなあとぼくは感じた。そして、今まで大根のためにがんばってきて良かったなあとしみじみ思った。

次の日、収穫祭を行った。みんなで育てた大根などと一緒に汁を作った。みんなで食べてみると、大根が、あまくてやわらかくてとってもおいしかった。そして、みんなから笑顔があふれた。あんな小さな一つぶの種からこんなにたくさん笑顔が生まれる農業ってなんてすごいんだろうと思った。

ぼくは、農業というすばらしい体験に出会えて本当に良かった。これからも農業とたくさん笑顔を守っていきたく

いと思う。

農業の楽しみとは

松山小学校 六年 猪俣 穂香

私達六年生は、今年里いもとポップコーン用とうもろこしを育てました。種まきをするとき農業の支援員の人達にまき方の注意点を教えてもらいました。とうもろこしは、やさしく土をかぶせること。里いもは水がたっぷり必要だということ。それを大切に種まきを行いました。私は、去年、五年生のときの農業科の学習で農業が好きになりました。虫は苦手だけど、あのしゅうかくするときの喜びは、今でも忘れません。今年は、とうもろこしを松山小学校の行事の「けやきフェスタ」で使いました。自分達の作ったとうもろこしのポップコーンをみんなが食べてくれると思うと楽しみでしょうがありませんでした。六月になると、芽も出て葉もひらき、楽しみな感情が込み上がってきました。そして、里いも、とうもろこし、両方がどんどん育ち、私はおどろきました。里いもの葉っぱがとっても大きくなったことです。葉っぱのかさができるかと思うくらいでし

た。私は、初めて里いもの葉を見たので、新しい発見をしました。

草むしりなどの作業もあり、しゅうかくをしました。十一月六日にみんなで協力してしゅうかくしました。とうもろこしは、一、二年生も手伝ってくれて、六年生としてしゅうかくと教えてあげようと一生けん命やりました。それから、一、二年生が手伝ってくれて、感謝しています。

けやきフェスタ当日、ポップコーンの店にはたくさんの人達が来ていました。それを見てわたしは、農業の楽しみとは「食べてくれる人達の笑顔」なんだなあと思いました。三学期には、里いものを「こづゆ」にして、いただきます。そのときも、みんなの笑顔が見られたら嬉しいです。

支えてくれる支援員の方々への感謝

第三小学校 六年 小澤 沙友里

「支援員の方々がいるからこそ、農業科なのではないのかな。」何もかもない、土と草だけの畑をスタートさせるのも支援員の方々です。マルチをつけたり、土をたがやしていただいたり。じゃがいものたねいも植えては、粉をつけ

ていただいたり、植え方を教えてくださったり、このようなことを当たり前に思ってしまう人がいるようです。この「当たり前」という考えは、直さなくてはなりません。

土をたがやすことからしゅうかく祭までを、支援員の方々がいないとして考えましょう。じゃがいものたねいも植え。土はたがやされていなく、たねいもがとても簡単には植えられません。他にも、さつまいもの苗植え。マルチもなく、わらしいてありません。じゃがいもの葉もぼうぼうに生えていて、じゃがいもがぎゅうぎゅうづめです。つめつめのままでは、じゃがいもが元気に育ちません。夏休みには水やりする人がいなく、しゅうかく祭に使う野菜が、かれてしまいます。

これはあくまでも私の考えではありますがもしかしらこのようなことがあるかもしれません。

しゅうかく祭では、植物の実りを祝います。私たちの努力はもちろん、支援員の方々が支えてくれ、野菜が元気に育ちました。つまり、野菜が支援員の方々への交流を作ったのだと思います。確かに農業の大切さ・野菜から知った感動もとても大切です。しかし、何回も言いますが、支援員の方々がいてからこそこの「農業科」ということを忘れないようにしなくてはなりません。

ぼくにとっての農業

熊倉小学校 六年 五十嵐 大貴

今年ぼくは、農業科を通して改めて知った事や感じた事があります。

それは、命の不思議や植物の大切さです。ぼくがそう思ったのは、高学年になってからです。前のぼくは、農業のことがあまり分からなく、農業と言っても農作物を作る事などしか頭になく何も考えていませんでした。しかし、今では、不思議に思った事や意見なども考えられるようになりました。このことからぼくは、植物の種のも不思議や植物の命の大切さという事も考えるようになりました。そう思わせたのは、ぼくの体験からでした。ぼくは、ある日植物に水をくれるのをわすれました。次の日も、また次の日もわすれ、「植物大丈夫かな」と思い畑に行きました。すると、なんと植物が芽を出していました。ぼくは、そこでなぜ何日も水をくれないのに育っているのかなと不思議に思いました。人間でたとえると、何日も食べ物を食べてない事になり栄養不足で死んでしまいます。この事からぼくは、「植物は人間よりがまん強く、そして人間よりたくま

しく生命があふれているんだな」と思いました。

次に、植物の命の大切さです。ぼくたち人間は、いろいろな植物の命をいただいて生きています。しかし、もしその植物がなくなったらぼくたちは生きていけません。そのため、「いただきます」、「ごちそうさま」といつも感謝の気持ちをもち、これからも言い続けたいと思います。その言葉はごはんを作ってくれた人はもちろんのこと、作物そのものにもあてはまる言葉だと思います。

この先、ぼくは家の祖父母がしている仕事、りんご作りを受けついで、りんごを育てる農家になるかもしれません。祖父母が大切に守り育ててきたりんご畑をいまままで学んできた農業をいかせばきっと祖父母が作っていたりんごの味をこえられるんじゃないかなとぼくは思います。

六年間の農業を通して

熱塩小学校 六年 福王寺 郁哉

ぼくは、農業は、少し難しくコツがつかめないの、いつも戸惑っていました。しかし、ファームステイや収穫祭も終わり、残ったねぎと白菜を全部収穫したとき、(ぼく

の六年間の農業は全て終わったんだ。」と思い、さびしいような気もしましたが、達成感に満ちていました。

ぼくが初めてやった農業はポップコーンの種まきでした。その時は、（農業って楽しいなあ。）と思っていましたが、学年が上になると、作業も難しくなり、思うようにいかなくなっていました。それでも農業っていいな、と思う時は収穫祭で、ぼくたちが作ったおもちや野菜を食べてもらうときです。ぼくは、自分の育てた作物が食べてもらえるのがとてもうれしかったです。

そして、ぼくは六年生になりました。農業学習も、難しくなってきました。農作業をしているときは、話をよく聞き、集中し、手順通りにやります。作業をしながら今までの体験を振り返ってみると、二回やったものがないことに気付きました。あるとすれば他の学年のを少し手伝う程度です。そう考えると、自分が今やっていることに、さらに集中できました。なぜ今まで難しく感じているんだろうと考えてみると、色々なことが分かってきました。自分は、難しい仕事はあまり積極的に行っていなかったんじゃないのか。いつも、早く終わらせたいだけ思っていたのではないか。そういう点を見直して、ぼくは、残り少ない農業活動の中で、自然と、作物と、きちんと向き合っていきました。

した。

そして最後の収穫。さびしさもありましたが、スッキリした感じがありました。ぼくが農業学習を通して分かったこと、それは、何事にも一生けん命取り組みむということです。その事で、物事の本質が見えてくるのだと思います。この経験をまたどこかで生かしていきたいです。

感謝の気持ちで

熱塩小学校 六年 菊地 唯

私は、小学校での農業科の学習を終えて、一年生の時よりも、農業に対する思いは強くなったと思います。以前は、興味さえ無かった作業でも、今では家でも手伝ったり、学校でも、自分から取り組んでいます。自分で農作物を植えて、育てて、収穫するというのは、とても素晴らしいことだと思います。

今年、私たち六年生は、農業科支援員さんの家の農業を手伝うという、ファームステイというものを初めて体験しました。二回行いましたが、どちらも私は菅井さんの家を手伝いました。菅井さんの家の畑には、およそ四十種類

もの野菜や果物が植えてありました。全ての畑の作物を見せていただいたり、畑の草むしりをしたり、農業をするのかかせない機械なども見せてもらったりしました。たった数人ほどで、なぜこんなにたくさん種類の作物を育てられるのか、一つ一つの野菜の育て方、収穫する時期など、どれもちがうはずなのに、なぜ覚えられるのか、そして、なぜそこまで作物を育てたいと思うのかがすごく疑問に思いました。私だったら、いくら農業が好きでも、大変な思いをしてこんな多様な種類の作物を育てるなんてできないと思います。毎日時間を農業に費やして、作物を植え、育て、収穫するという工程をすべてこなすなんて、さすが農家さんだなと思いました。

他に、私たちはねぎ、じゃがいも、うるち米、もち米、とうもろこしを育てて収穫しました。どの作物も、収穫がすごく大変だったけど、無事に収穫祭や農業祭に出すことができました。収穫祭で、自分たちが育てた野菜を食べてみたとき、（農業をしてよかった。）と改めて思いました。農家の方たちは、自分たちがいっしょうけんめいに育てた作物をおいしく食べてもらうためにがんばっているんじゃないかと思いました。これからは、農家の方たちの気持ちに答えられるように、感謝して食べたいと思います。

ありがとう、食事ができるよ。

塩川小学校 六年 武藤 燎平

「コロコロ、カラン。」

大豆を持っているだけで、あの特ちょう的なおいが鼻にスウツと入り込んでくる。ふと窓の外を見ると大粒の雪が降っていた。僕はこの大豆が小さな種だったことを思い出した。

農業科活動になるといつも弱い自分が出て来てしまう。農業科活動をすると言われても興味が持てない。それが今までの自分だった。

「今年は大豆を育てます。」

それを聞いただけで、もう一人の育てることに興味を持たない自分が、

「育てるの簡単で、やりがいなさそう。」

と最初に思っていた。

大豆の種を植えたある日から、その気持ちが少しずつ無くなっていた。種は畑に直接土に植えると思ったが、あみをかけて植え、鳥に食べられないように工夫していた。雑草は根っこまで取らないと、大豆の大切な栄養が取られてしまうと教わり、思いつ切り力を使ってぬく苦労を見つ

けた。この数々の工夫と大豆に対する愛情が無いと、大豆はおいしく育たない。このことに気付いてからは、興味のない自分が、どこかで消えていた。

「おいしく育ってね。」

と思いながら世話が出来たのだ。今までの自分は、農業科活動を作業とかん違いをした。大豆の農業科活動を通してからは、普通の作業では無い、育てるということを実感し、新しい自分へと変わり始めていた。

大豆の思い出が終わり、豆腐を一生けん命に作っていた。「おからと豆乳に分けられた。順調だね。」

ここまでは、とても良くできたが、にがりを入れるところから失敗して、形がくずれてしまった。でも、この小さな豆腐が、いつも食べている豆腐よりやさしい味に感じられた。

大豆の農業科活動を通して、他の作業には無い野菜を育てることの大切さを実感したことで、普段の食事においても、食べられるありがたさが感じられるようになった。

農業とは協力すること

塩川小学校 六年 栗村 大智

ぼくは、小さい頃から高田のじいちゃんとはあちゃんの畑の仕事の手伝いをするのが好きだった。家のご飯に出てくる野菜や米はほとんど高田で収穫したものだ。

今年、ぼくは六年生になった。学校の農業科で作る野菜は学年によって違う。六年生のぼくたちが取り組む作物は大豆だった。大豆からは色々なものが作られる。みそやしょう油、納豆に豆乳などがその例だ。

六年間も作物を育てていると何から始めるかもう分かっている。いつも通り種まきからだ。「素手で土を掘るのは大変じゃないか。」と思っていたが、先生が持ってきた道具で簡単に土がほれた。高田での畑仕事でも見たことがないスペシャル道具だった。ここからぼくらの六年の農業は始まった。

それから一週間ずつ一組と二組が協力し合って、交代しながら水やりを行った。ぼくは大豆が成長していく様子にワクワクしていた。授業での雑草抜きだけでなく、家に帰った後も様子を見に行ったりした。高田のおじいちゃんの言葉を思い出す。「農業は、みんなでやるから、おいしい

収穫できるんだ。」

農業は一人で全ての作業を行えるわけではない。何十年も野菜を作り続けている高田のおじいちゃんやおばあちゃんできえ、ぼくたちが手伝いをして収穫することができる。ぼくの手伝いと言っても大きな機械を動かしたり、正確な作業をしたりすることはできないが、おじいちゃんもおばあちゃんも笑顔で話をしながら作業をしている。一緒に作業をしている時間は楽しくて、あつという間にすぎていく。協力して作業をするからこそ収穫の喜びを一緒に分かち合うことができるのだと思う。

農業は協力すること。ぼくはそう考える。中学校へ行っても、夏休みには高田に行っておじいちゃんとおばあちゃんの手伝いをして一緒に収穫を喜び合おうと思う。

農業が教えてくれたこと

高郷小学校 六年 清野 花香

農業科の学習を始め、六年が過ぎました。農業科を始める前と現在の私とは、農業に対する考えがちがっています。以前は、「農作業なんてよごれるだけ。」というだけで

した。しかし、現在の私は、「農業とは、とても大切な仕事だ。」と感じています。

農業支援員の方々に、農業の大切さや楽しさなどを教えていただきました。私が四年生の時のことです。

「自分の体をつくっているのは、自分。野菜も実をつくっているのは野菜自身。成長を手伝っているのが私たちだ。」

と教えていただきました。確かに私たちだけでは、つくれません。野菜が頑張り、そして私たちが一生懸命野菜の成長を手伝うからこそ、立派な野菜ができるのです。植物だって野菜だって、私たちのように生きていて、私たちは、農業のおかげでこうして野菜の命をいただくことができるのです。農業に対する考えが、いつしかこのように変わっていったのです。「よごれるからいやだ。」という考えも、よごれるまで頑張っているということが分かり、農業がだんだんと楽しめるようになりました。

私たちは、作物を食べて生きています。私たちの命は、多くの命に支えられて今を生きているのです。農業科を通してこのことに気づきました。時には、努力しなければいけないこともあります。しかし、一人一人が協力し合い、一生懸命野菜を育てることの楽しさを、農業は無言で私に

教えてくれたのです。

いつか大人になった時、いろいろなできごとがあると思います。もちろん、いやなこともあるかもしれませんが。その時は、農業科で学んだことを思い出し、いやなことも楽しいと思えるようにしていきたいと思います。

喜多方市小学校農業科作文コンクールに寄せて

「農業科」と出会って

北海道教育大学教育学部札幌校 総合学習開発専攻

生活・食育グループ 四年目 荻野目 哲

喜多方市小学校農業科が始まって今年で八年目になりました。その中で私は、昨年度と今年度の二年間、作文コンクール作品集の編集のお手伝いをさせていただきました。農業科の何たるかを知らずに必死に作品を読み、形にした昨年度。紙に綴られた作品にこめられた皆さんの想いを読み、その姿に思いを馳せるだけでした。

しかし、今年度は喜多方市教育委員会の皆様のご厚意により、生の農業科を見させていただき、一緒に田んぼに入って田植えをさせていただきましたことができました。田植えを経験したことのある子もいれば、初めて田んぼに入るという子も。それでもさすが五・六年生といったところでしょいか。これまでの農業科の学びを生かして、すぐに手慣れた様子で進めていました。そして、作業をしている多くの子が笑顔で活動しており、終わっていない列を見つけると、自分から苗をもらいに行き、手伝いに行く姿が見られました。こうした様子を間近で見学させていただき、

「これが農業科の“実”の部分なのかもしれない」と感じた春の見学でした。

作文コンクールが始まってから六年。これまでの作品の中には「農業(科)を他の県や小学校でもやってほしい。」といった感想が書かれたものがいくつもありました。その皆さんの思いは確実に広まっています。

今年度、私は農業科の授業のほかに、北海道美唄市で行われている

「グリーン・ルネサンス」の取り組みを見学してきました。「グリーン・ルネサンス」とは、皆さんの農業科の取り組みを元に、北海道に合わせた農業を幼稚園・保育園児から高校生までに体験してもらおうといった取り組みです。その中で、ある小学校の一年間の活動を見てきました。種をまき、暑い中の除草や草むしりがあり、収穫し、みんなで調理をしていただく。その一連の活動の中には、農業科でもみられたような、笑顔やみんなで協力し助け合う姿が何度も見られました。これらはすべて、農業を通して得られる“実”なのではないかと改めて感じる機会になりました。

私自身、今年度も大学の実習畑を借りて農業を行ってきました。大学生活最後の農業ということで、一昨年収穫直前で腐くさってしまった人参のリベンジと、昨年うまく育った大根、そして今年度初めて挑戦ちようせんするホウレンソウの三種類の野菜の種をまきました。

前回の失敗を踏ふまえて、畝の高さや場所を考えて育てた人参は、何本かは野生の動物に食べられてしまいましたが、オレンジ色の太い人参ができました。大根は、たくさんとれたものの、切ってみると中には黒い筋すじが……。調べてみると、病気(いおう病)の可能性が高く、泣く泣く捨すてることにしました。ホウレンソウは水が足りなかったため途中で枯かれてしまったものもありましたが、小ぶりながらも何とか収穫できました。

今年もたくさん収穫と反省を得た、私の「農業科」。そんなみのりよりも、うれしかったことがあります。それは、毎年大学の実習畑の土ならしを行ってくださる近所の農家の方に、私が管理している畑を評価してもらえたことです。

「兄ちゃんの畑はしっかり手が入っているね。」

その一言で、分かる人には分かるんだ、今までやってきてよかったと

思いました。そして、農家の方が育てていたネギの苗を分けてもらいました。そのため、実は四種類の作物の収穫があったのです。農業には、収穫物以外にも、人との出会いがあるということを実感した一年でした。

最後になりますが、今年度の作文を読んで、とても強く心に残った作品がありました。それは、「支援員さんが手伝ってくれるのが当たり前だ」と思っている人がいるが、それは違う。支援員さんがいてこそ、私たちは農業科の授業ができる。」といった内容のものでした。育った作物に対する感謝はもちろん、それを調理してくれる人や、栽培にかかわってくれた人々、そして、一緒に活動を行ってきたクラスや学校のみんな、非常にたくさんの物や人への感謝の気持ちを知らることができるのが、農業の良いところではないかと思います。

喜多方市で始まった農業科は確実に全国に広まってきており、それは私自身の考え方を広めてくれたものでした。皆さんには、農業科の授業を通して、多くのことを学んでいただきたいと思います。二年間本当にありがとうございました。

平成 26 年度喜多方市小学校農業科作文コンクール審査会

【審査員】

喜多方市立熱塩小学校長	高橋 吉博
喜多方市 P T A 連絡協議会長(熱塩小学校 PTA 会長)	瓜生 昭彦
福島県会津農林事務所喜多方農業普及所経営支援課長	薄 真昭
福島県会津農林事務所企画部地域農林企画課 主任主査	宗方 宏之
会津いいで農業協同組合営農部長	鈴木 幸男
喜多方市小学校農業科支援員	山田 義人
NPO 法人喜多方市グリーン・ツーリズムサポートセンター理事長	伊藤 幸太郎
喜多方市産業部農林課長	佐藤 健志
喜多方市教育委員会学校教育課 課長補佐・指導主事	小杉 一浩

【特別審査員】

関東学院大学教授	佐藤 幸也
喜多方市教育員会教育長	芳賀 忠夫

※この作品集は北海道教育大学教育学部札幌校 総合学習開発専攻 生活・食育グループの全面的なご協力により編集・発行することができました。心から感謝を申し上げます。

編集後記

平成 21 年度から始まった「喜多方市小学校農業科作文コンクール」も今回で 6 回目を迎えました。応募作品 1,670 点の中から選ばれた 45 作品はどれも素晴らしい内容で、審査会では、審査員の方々が口をそろえて「すべての作品が素晴らしい！」と大絶賛でした。

作文の内容は、お米の事や野菜の事、種を植えた時や収穫の時など様々ですが、多くの作品に書かれている共通の言葉があります。それは、

「しえんいんさん」「しえん員さん」「支援員さん」

です。支援員さんは、農業科の授業の中で農業についてのお話や農作業の仕方、自然や生き物に関する事などありとあらゆる事を子どもたちに優しく教えてくださいます。そんな支援員さんは子どもたちにとっても人気があり、「ヒーロー」です。

農業科を支えてくださる方は支援員さんの他にもたくさんいらっしゃいます。地域の皆様方も「先生」であり、とても頼りになる存在。学校の先生方にも、他にはない「農業科」という授業を学校全体で盛り上げていただいております。このように、農業科はたくさんの方のご協力があるからこそ成り立ち、これからもそうであると思います。

来年度も新しい「農業科」が始まります。3年生になる子どもたちは初めての授業ですね。どのような授業なのか「ドキドキ」だと思いますが、何も心配ありません。この作品集を読めば全て分かりますから…。

(担当主査 穴澤 英明)

平成 26 年度喜多方市小学校農業科作文コンクール作品集

平成 27 年 2 月 発 行

喜 多 方 市 教 育 委 員 会

